

吉田松陰と日蓮聖人

—— 草莽崛起の志 ——

石川康明

大いなる誓願を心に抱いて生きぬいていく△立志の精神▽こそ、人間にとって最も大切なことではないでしょうか。志とは、高い理想と希望を持って、限りなく探求していく献身の精神であり、内から湧きおこってくる新鮮な情熱と不屈な意志にほかなりません。△南無▽とは婦命きよみことという。婦命とはわが命を仏にたてまつるという事である。それは志という事である。かけがえない大切なものを仏にささげる志という文字を心えて、「凡夫は仏になれるのだ」(事理供養御書)と、日蓮聖人もその△無二の志▽の重みを説いています。

先覚者といわれる人々は、いずれもこの△立志の精神▽の持ち主でした。真理や理想をめざして数多くの人々が行動する条件がまだない時に庶民の苦しみを除くためにわが

志を宣言し、その志に無関心であったり抑圧しようとするただ中であって苦難を突破して立志の精神を貫いて実践する——そのような魂の足跡を開拓した人々の生き方は使命を担って刻苦奮闘した志の尊い輝きをしるしています。仏の国土を浄め人民の塗炭の苦しみを救うために幕府の為政者に向って立正安国の諫曉に立ち上った日蓮聖人は、まさにそのような人でありました。

そしてまたここでとりあげる、近代日本への道先駆的にきり開いた吉田松陰よしたかかげも立志の精神に生きた人でした。

ところで、その吉田松陰は人生の最期の年に、なんと日蓮聖人との出会いの一瞬をもっていたのです。松陰は、獄中において日蓮聖人の生き方を思いおこし、△草莽崛起そうぼうきよつき(名もなき庶民の決起)の実行を確信しつつ、ついに△志をつ

らぬいて心を安んずる√境地に到達したのでした。それは、思いがけない出会いであるよりは、松陰の学問と人生の中で出会いの以前から魂の奥深く無意識的に刻み込まれていた憧れが瞬時にわきおこったものであり、道を開拓した先覚者への共感にねぎしていました。

それでは、吉田松陰はどのようにして日蓮聖人と出会ったのでしょうか。

1

—△死んでも自分の至誠は朽ちはてることはない。死んでいく身をいささかも惜しいとは思わない√。

安政六年（一八五九）十月二十七日、吉田松陰はこの確信をいただきながら江戸伝馬町の獄で斬首の刑に処せられました。

この安政の大獄に連坐して刑死する一日まえ。松陰は『留魂録』を書きしるしました。

身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも
留めおかまし大和魂

と詠んだ辞世をそえて、およそ次のような魂の足跡をひれきしています。

△私は、孟子の『至誠にして動かざるものはない』という一句を心がけ、誠をもってひたむきに生きてきた。しかし、この誠の心が通じないで何事もなすことなく今日に至

った。これは私の徳がうすいたためであるから、今さら誰をとがめ、恨みに思うことがあろう。三十年の人生は短いといえは短い、しかしそこに人生の四孝は備わり、成長もした実りもしたのだ。もし同志の人のの中に、私の死を惜しんでくれる人があるなら、その時こそ後に誇ることのできる種子がまだ絶えなかったことになるのだ。玉となって砕けても瓦となって為すことなく人生をまっとうするな、という気持を忘れずに、どうか私の志をうけついでいってもらいたい√。

死を眼前にした松陰の澄みきった心境は、刻苦奮闘しながらまっしぐらに救国の志に旬じた先覚者にして初めて語りえる魂のしるしでありました。尊王倒幕から統一国家日本本樹立へ、その革命の大義に身をささげ、勇猛をふるいおこして充実した生命を燃焼させた思想と実践の源泉は大いなる△誠の志√を貫き通し、純粹に△誠の志√をもって生き、そして死んでいく生き方にありました。松陰は、この大志を実行にうつし、次の世代に種を蒔くことのうち、永遠の生命がとどめおかれることを自覚し、△誠の志√の不朽さを信じた先駆的思想家でありました。

2

吉田松陰（天保元年△一八三〇—安政六年△一八五九√）は、長州萩の松本村に、微禄の家士・杉百合之助の

二男として生まれました。幼名虎之助、のち大次郎、寅次郎と名のり、号を松陰と称します。松陰の人生を見ると、真実をまっすぐに求め、たゆむことなく学び、行動し、諫言に立上り、教えつづける姿に接して感動させられます。

幼少の頃から学問好きの父より田畑やわら仕事のない間に尊王や至誠の大切さを教えられ、六歳で叔父吉田大助の家をついで山鹿流兵学師範の道を歩みはじめると、叔父玉木文之進から兵学や詩文書札について厳しい教育をうけます。十一歳の時に藩主毛利慶親の前で山鹿素行の『武教全書』戦法篇を講義して名を高めてから、十九歳で兵学師範として独立するにいたるまで、かれは兵学修行にまっすぐつき進みます。しかし、この兵学修行のなかで松陰は、精妙な解釈をほどこすだけの学問のための学問ではなく、実践に役立つ兵学を求めていきます。とくに山鹿素行から日常の倫理より国家の存亡におよぶ視野をもち志士仁人となっていく不変の志の重要さを学びとりました。「山鹿素行の学問を尊敬するのは、官学たる朱子学を公然と批判して赤穂に流されたごとく、強大な権力の咎めを恐れずに、自分の信ずるところをあくまで主張してやまなかったからである」(『武教全書講録』)。松陰のつかんだ兵学とは、じつにこのような志の哲学であり、かれの生き方はここに最初の芽ばえがありました。

松陰もまた時代の子でした。かれの幼少期である天保の

時代は幕藩体制の屋台骨がぐらぐら揺れて政治的威勢は衰え経済的にも危機におちいつていました。幕府や諸藩は苛酷な重税や家臣の捧給切り下げなどで財政立直しを図ったため、天保八年(一八三七)の大塩平八郎の乱をはじめ全国的に百婆一揆や打ちこわしがおこり、一身をかえりみず困窮を救うために立上る指導者や人民が現われていました。そのうえ、欧米の列強が日本の沿海に黒船で押し寄せ開国を要求してきていました。インド・中国を侵略した外国の圧力に幕府も藩も有効な対策を用えず国論は分裂し、植民地化の危機が眼前にひろがっていました。

松陰は、この時勢に鋭く反応していきます。山鹿流兵学だけでなく海防や西洋の知識をもたなくては国を滅亡から救えない——かれは各地の実地踏査と学問研究の旅にとりくみます。二十一歳の時、平戸・長崎などに赴き異国船の姿や北九州の地形を見聞し、学者を訪問して『近時海国必読書』など西洋の歴史・地理・国情・陣法などを伝える書物を読みふけり筆写しつづけました。翌嘉永四年(一八五〇)には江戸に出て、安積良齊・山鹿素水・古賀謹一郎・佐久間象山の塾に学び、兵学・経世学などを学びます。この時は、受講・論読・討論を行う研究会が月に三十回もあり、ほかに武芸の時間や自由討議も行ない目の回るような学問修行に身を粉にして励みます。ご飯のほかは金山寺みそと梅ぼしという粗食の節約を心がけもしました。やがて

同憂の志士と親交をむすび談論風発に日々を送ります。とくに洋学の第一人者・佐久間象山との出あい、かれに西洋を知ることによって、それに対抗しえる独立国家日本をきづいていく態度をしっかりとうえつけました。この年の十二月、二十二歳の松陰は熊本で知りあつて以来の同志・宮部鼎蔵みやべていざうとともに脱藩して東北巡歴の旅にのぼります。水戸で会沢正志斎あいざわせいしさいと会い日本の歴史を勉強せよと教えられ、水戸学の洗礼をうけて尊王攘夷の立場を強めていきます。

さらに弘前・青森まで足をのびロシアと近接する東北の情勢を見聞し、外国船が津軽海峡を無断で横行している現実に驚きます。この脱藩亡命の東北調査旅行は、土籍剝奪、家禄没収と十年間の諸国修行の許しを受けるに及び、いっしょに長州藩の兵学師範のワクをこえて、国事を一身の課題としていく最初の決起を意味するにいたしました。

嘉永六年（一八五三）六月、ペリーは黒船四隻を率いて浦賀に來航し開国を迫りました。二十四歳の松陰は、国家の存亡を一身に担う使命を胸に浦賀に走ります。そして、佐久間象山の激励をうけ、「密航して五大州の知識を獲得し植民地化の危機を防ぐ」という計画を実行にうつそうとします。

松陰はまず藩主に「将及私言」を上呈し、「天下は天朝の天下であり天下の天下である。君臣上下一体となり天下をあげて防備を固めるべきだ」と諫言します。同時に創航

計画の実行にとりかかり、ペリーに続いて長崎に來たロシアの軍艦に乗ろうとしますが機会を逸してしまいます。しかし、安政元年（一八五四）、ペリーは再び來航してきました。三月三日には日米和親条約が調印されましたが、松陰の耳には届いていませんでした。かれは「いま渡海の計画を決定し貴船への乗船を秘密に請願し、ひそかに海外へ脱出して五大州を周遊したいと思う。そのために国禁をもあえて犯そうと決意したのである」との手紙をたずさえて二十五歳の生命を燃え立たせて門人金子重輔と二人で下田より夜陰にまぎれて秘航にのり出しました。三月二十八日午前二時ごろのことです。だが、米艦では海外に知識を示めるかれらの気持ちに感心しながらも外交上の影響を考えて密航を拒否しました。この企ては失敗したものの、二百五十余年の鎖国の禁を打破して渡航し世界の実情を探るといふ行動は、時だれ一人として実行したことのないう破天荒な行動でした。近代日本の夜明けをもたらす端緒は、この一事にはじまりました。松陰の思想と行動が国家社会の動きに先んじて歴史を開拓していくのです。それはまた、松陰じしんの多難で波らんの運命をも決定づけていきました。二十六歳から死にいたる後半生は、牢獄と幽居の生活を通して、諫言と討幕の実践に決起するとともに統一国家を構想する大志の種を蒔く教育活動に傾注されていきます。

松陰は、下田で捕まり江戸伝馬町に入牢したのち、萩の

野山獄につながれます。このとき、△二十一回猛士▽と自称しました。二十一回におよぶ勇猛心をふるいおこして世直しに決起する、という△誠の志▽の表明でした。松陰は、脱藩亡命の東北旅行とペリ来航に対応した藩主への諫言（規諫きかんという）と渡航計画の実行の三つを「猛をふるったもの」といい、あと十八回の猛があると語りました。野山獄でも休まない学問研鑽は変わりませんでした。獄中一年間で合計五百冊の読書に励み、同囚の人に『孟子』『論語』を講義し自らも『幽囚録』などを書きしりました。この講義は、野山獄を出た直後から父宅の幽居生活で家族一同に対しても続けられ、△松陰の松下村塾▽開設のきっかけとなります。

安政三年（一八五六）、三畳半の室にこもりながら、松陰は親友の周防勤王僧・月性げつしょうに手紙を書き「まだ天子に願って幕府を討つべきではない。大敬が外にいる時に国内が攻めあうことはよくない。幕府を諫め諸藩が心を合わせて強国に対処すべきだ。藩主を通じて幕府を諫め、もし聞き入れなければ藩主を押し立てて討幕のり出すべきである」と語りました。これを読いだ月性の友人である僧・黙霖もくりんより「幕府政治の霸道を倒し王政復古をはかるべし」との手紙と山県大弼やまがたぢくの『柳子新論』（討幕と王政復古を論じた秘書）が送られてきます。松陰はこれを読んで、人民と志を同じくし身分差を破った全国民意識に立った討幕論へと思

想を深化させていきます。△規諫▽を尽くし尽くしぬいて大罪を知ることなければ、勅旨を奉じて公然と幕府を討ち倒す、という革命の大義に身を献げることが肝に銘じました。「われら国主に忠勤するは、すなわち天子に忠勤するなり。もし事が成らずして半途に首を刎ねられたればそれまでなり。もし僕、幽囚の身にて死なば、われ必ず一人のわが志を継ぐ士をば後世に残しておくなり」。

民衆の志をおのれの志とし、諫言と討幕に決起して△天下の天下▽を実現していく△誠の志▽の実践化―松陰の松下村塾は「わが志を継ぐ士」を生みだすことを教育方針としました。

3

松陰は、安政三年（一八五六）八月二十二日に『武教全書』を三畳半の幽室で況弟ら数名で講義しました。△松陰の松下村塾▽はここに公式に発足しました。やがて中谷正亮・吉田栄太郎ら軽輩の青少年が近隣から聴講に参じてきました。△学問とは人間として生きる道を学ぶことである▽△進徳と専心を上等とし精勤と修業を中等とし怠惰と放縦を下等として、一人ひとりの勉強ぶりと人物を評定し「大志を遂げて心を安んずる修行」の目やすとする▽という指導方針を立てました。翌安政四年（一八五七）十一月五日、二十八歳の松陰は八畳一間の講義室に補修された塾

舎に三十人をこえる塾生と一緒に寝起きする全寮主義の教育を主宰しました。入門料のほかは授業料をとらず、すべての青少年に学問修行の門をひらいたのです。松陰は、ていねいな言葉で物静かに、だが心魂をこめ苦楽寝食を共にしながら、塾生の才能を伸ばし気魂をはぐくむ大志下種の教育に専念します。「何のために学問するのか。学者になつてはいけない。人は実行と立志が第一である」と語りました。また、こうも教えました。「学問は休むべきではない。一日怠けてしまうと、そのために大切な機会を失うことになる」「誠実と純朴を心がけ、自由にのびのびと励ましあつて修行せよ」「目前の業績第一主義（功業）の人は仕事を間に合せにするので完全にやり遂げることがない。逆境をきり開く学問を身につけるよう専念し、大義をやり遂げる志を貫くがよい」。松陰は、不平等条約を結んだ幕府の屈辱的態度を批判し、洋学のすすめを説き身分差別の不当さを断じ、日本全体を一家とみる統一国家の理想を示しました。藩校中心の藩の教育姿勢を批判し身分の上下にこだわらない教育をおすすめ、専門的知識もつて大誠の志をもつて生きぬく覚悟を鼓吹し、両親をわが身のごとくあつかい人を敬い愛情をそそぐことを説きました。志気は胸に燃えあがり、日本と世界に開眼していく松下村塾の実践教育の中から、やがて明治維新にいたる歴史の若き担い手たちがぞくぞくと育っていききました。久坂玄瑞、

高杉晋作、入江杉藏、野村和作、品川弥二郎、伊藤利助（博文）らの門下生たちでした。松下村塾は安政五年七月に正式認可され、その四カ月後に終止符を打つまで二年四カ月続きました。松陰は、大誠の志を留魂し種を蒔いた偉大な教育者でありました。

4

松下村塾の教育活動とともに、松陰は大規謀の運動もたゆみなく行なつていきます。安政五年（一八五八）正月、藩主に「狂夫の言」を提出し圧力に屈して条約を結ぼうとする幕府の弱腰と内憂外患に手をこまねいている藩当局の怠慢を批判、「天下の大患は、その大患たるゆえんを知らざるにあり」と主張し、身分にかかわらず人材を登用せよとせまりました。いっぽう、天下大変革の兆しを予見しつつ、久坂よ京に行け、高杉よ往け、と愛弟子を東上させ情報収集と同志間の結束行動にとりくませました。

この年の四月、井伊直弼が大老となりアメリカのハリスと条約調印交渉を行ないます。松陰は五月に『愚論』『続愚論』を書いて「万国を航海し外国の事情を知つて国を守る大業をたてる」意見を京都の世論とするよう要請しました。六月に日米和親条約が結ばれるや、『大義を議す』を藩に提出し、アメリカにへつらつて国難をかえりみない幕府を大義に準じて討滅誅戮すべし」と討幕論をかかげ、ま

た『時義略論』と題する意見書をさし出して「長州は義兵を派遣し幕府に変わって京を守護せよ」と献策します。この憂国の「猛」は、井伊暗殺計画を聞くにおよび、ついに井伊大老の側近、紀州藩家老水野土佐守暗殺計画から井伊で安政の大獄を断行し京を制圧せんとしていた老中間部詮勝まなべあきかつ要撃策を計画するにいたります。この無謀ともいえる計画に驚いた藩当局は、松陰を嶋家の一室に謹慎させ、十二月五日野山獄に再入獄いたしました。「僕は投獄を悲しんだり、恐れるものではない。ああ、匹夫も志を奪うべからず」。

5

安政六年（一八五九）の新春―三十歳の最後の人生を松陰は野山獄で迎えました。安政の大獄は嵐のように吹きあられ、各藩の志士は次々と弾圧されていきました。獄中から藩政府の偽勤王ぶりに切齒やくわんする松陰をいつそう失望におとしこんだのは、倒幕運動にとりくんでいた愛弟子の高杉・久坂ら多数の門下生たちより「先生の正論、苦心には感激していますが、天下の時勢が変り、義旗一挙は容易ではなくなっています。いづれ国のために身を捨てて尽しますが、それまでは鈍をおさめて下さい」という自重論がもたらされたことでした。高杉晋作からも弾圧の中で動くに動けず、また時勢の推移を見て時を待つという判断の方が

結果的には正しかったのですが、松陰は信賴していた高杉ら門人に裏切られた思いがして、憤まんを抱き絶望と孤立の念を深めていきます。「忠義とは鬼の留守の間に茶にして飲むものではない。僕は忠義をなす。諸友は功業をなす者か。功業をなす者は多い。忠義をなすのはわが同志数人のみ」。悲痛な思いをこめて絶交の言葉をはく。松陰に師事していた同じく自重論に立つ桂小五郎にも「功業功業と目をつける人は諫死はしない。時が来れば忠臣義人でなくとも功業はできるのだ。桂君、藩政を傍観するつもりではあるまい。時を待つのか諫死するのか」と書き送りました。煩悶の中で絶食に入り、志に生き大義に死ぬ覚悟を固めますが、絶食は父母や叔父の忠告で止めたものの孤高の魂を高ぶらせつつ、一人獄中で死を待ちのぞきました。二月には、入江杉藏・野村兄弟らの申出た伏見要駕策ふしむろがき（参覲交代で江戸に行く藩主の駕を伏見で留めて京に入らせ討幕の義挙をあげる策）にいちるを望みましたが、その兄弟も捕えられ野山獄と道ひとつへだてた岩倉獄につながれてしまい、松陰は悲痛の念をいよいよ深めるにいたりました。

四月、妹千代から「観音様をご信仰下さい」との手紙が届けられました。松陰はもともと神を尊崇し、仏教については「信仰するに及ばないが人に逆らってまで仏をそしめることはない」「仏法の信仰はよいことだが仏法に惑わされぬように」という態度をとっていました。だが、松陰はか

つて啞の弟のために熊本の清正公（本妙寺）に祈願したことがありました。人事を尽くしたのち、なお弟の身を思つて「情の迫る所、独り神明に倚るのみ」（西遊日記）との情愛をこめて切実に祈りをささげたのでした。「これは松陰の生涯中、あらはに神明にかけた祈願の唯一なるもの」（茂田井教亨「吉田松陰と日蓮宗」）でした。

さらに松陰は、真宗の信者である父母のもとに育ち伯父の円覚寺竹院の許にも訪れており、勤王僧の月性、黙霖とも親交を結んでいました。とくに江戸伝馬町に入牢の折、法華僧日命と出会い「四恩」の教えなどを聞いたこともありました。こうした仏教とのふれあいを土台にして松陰はこの時に法華経観世音普門品の内容に関する所見を書き伝えたのでした。これは「仏教に対しても一種の尊敬」を持ち「自身その信仰によって救済を求めはしなかったものの、正信としての仏教の立場は認めていた」と「吉田松陰と日蓮宗」の中で指摘されている通りでありました。

同時に松陰は、仏教の立場を尊重するだけでなく、自らのうけとめた仏教観をも吐露しており、しかも観世音普門品の内容を身命を惜しまず生き今や牢の中で辛苦に耐える自己にひきつけて実感的に読みなこなしていた事実も明らかです。松陰が法華経の一節を観念としてではなく自分の身に当るものとして理解しようとした姿勢もみてとれるのです。

松陰はいいいます。「私はまだ観音経は読んでいないが、法華経第二十五の巻の普門品という篇に、観音力というところを残らず気高いものとして述べている」。

実際は、江戸伝馬町に入牢していた折、くり返し法華経普門品を読んでいたのです。そして、その大意を入獄中のわが身にもひきつけながら、観音経を唱えれば罪人として縄をかけられても、たちまちぶつぶつと縄が切れ、牢に捕われると牢の鍵がはずれ、打首の刑に処せられたときにはたちまち刀がこなごなに折れる」と解説しています。

松陰の仏教観はこれで終るわけではありませんでした。かれは、性質が劣っていて仏の道に入りにくい教えである小乗と性質のすぐれた人への教えである大乘の別がある仏教の「奇妙なしかけ」を考えていきます。△小乗の教えからいえば、この観音力は人に信じる気持をおこさせるためであり、信ずる気持が湧いてくると一心にありがたいと思う心にさせる所にある。人は一心不乱の心境になれば、どんな苦難にあっても気にかげず細も牢屋も打首の刑も平気になれる。そこで心変わりして不忠・不孝・無礼・無道になる気づかいもない。しかし、初めから凡人に一心不乱と不退転と説いても耳に入らないので、かりに観音さまをこしらえておいて、人に信心をおこさせるのである。これを「仏が衆生を救うためにかりに設けた手段・方便」というとも述べ、法華経を「大へんおもしろく」読んだ体験を

通して仏道に導く方便としてつかんでいます。

ついで大乘の教えについてふれ、立身出世などとはちがう「出世法の大事」を説いています。△釈迦は天竺王の若殿から世を出る志を立て、生・老・病・死の悲しみからまぬがれることを悟り、世の人を教化された。老いず病いにかからず死にもしないと悟った「出世」がなければ、この世の人を苦難から救い彼岸へ連れて行く「濟世」もできないというのは、これをさしている。死にもしないとというのは、釈迦や孔子の教えが今日まで生きていて、人が尊びありたいと思ひ恐れもしていることをいうのである。だから今も死んではいけない。死なない人ならば、繩目も牢屋も首の座も、観音經の通りではないか。楠木正成や大石良雄も刀で身を失ったが今だに生きています。刀が粉々に折れたという、これが証拠である▽。

ここには、松陰の実感的で救国の大義を尺度とする法華經への読み方がうかがえます。それ以上に、出世法と濟世をめざす志のうち死んでなお死なない精神と苦難にめげない一心不乱の力を自覚することによって、絶望の死を正義に殉じた死に変え、さらに不朽の死としていく死生觀が法華經を通して語り示されていることに注目されるのです。

さらに松陰は、禍福は繩のようなものだと思ふことが必要だといえます。牢で死ぬのは禍いのようなだが牢にいるために学問もでき、自分のため人のため後世にも生残り、釈

迦・孔子など死んでいない人々の仲間入りもできるなら福となる。観音に福を求めるより、生きている限り苦難にたえて自分を励ましていく先に福があるというものだ。(四月十三日付の手紙)。

こうして松陰は、じつと苦難と絶望にたえながら、不死の道をさぐるうと自らを励ますのでした。

6

安政六年(一八五九)の四月、松陰が獄窓でたどりついた究極の思ひは、民衆の立場にたつて民衆とともに立上る、という志でありました。

—草莽崛起—

△名もなき庶民の決起、いまやそれだけしかない▽。これが死生を超えて再発見したひとすじの光明でした。諸侯はたのむにたらず、ただ草莽の志士、すなわち在野の同志でなければ倒幕をなしとげることではできないのだ。松陰は、道ひとつへだてた岩倉獄中の入江・野村兄弟に、この気持を伝え激励を与えました。「藩政府を相手にしたのが一生の誤りであった。これからは、きつと草莽と案を変えていま一段やってみよう」「ただ今の時勢を諸侯も公卿も解決できない。草莽の人によらねばならぬ。しかしまだ草莽も力がない。天下をわたり歩いて百姓一揆でも起つたところにつけこむ奇策があるかもしれない」。かれは、支配者の

論理ではなく、庶民の側に立って、ともに立上る思想にはつきりと開眼していくのです。

草莽とは、雑草のようにたくましく生きる在野の名もなき民衆をさしています。その民衆の一人として行動していく精神的自覚と社会的認識を意味していました。

崛起とは、山積する国家社会のあやまった現実をつき崩し、人間の心をほりおこして大志を湧きたたせ、困難を突破しつつ理想をめざして決起する勇猛なる実践のことであります。

松陰は、幕府も藩も酒に酔って正気を失なっているのも同然で、国の独立を維持する力はない、という意識を今やはっきりとうちだしました。それはやがて「朝廷も幕府もわが藩も、もう何もいらぬ」という結論にいたりました。国民国家を創りだす民衆思想家としての歩みを自覚するので、他人の力をかりず、ただ在野の草莽の士とともに決起することによって、「御一新」をもたらず実践的な姿勢を、それは意味しました。

そして、松陰は死に向きあつて初めて自ら「崛起の人」であることを堂々と宣言するのです。餓死・諫死・縊死・誅死みな妙。一死実に難し。しかれども生をぬすむのさらに難きに如かざることを初めて悟れり。実に草莽の案なり。時勢こそとまれかくまれ、義卿（松陰）が崛起の人なり。死ぬまで生きぬく庶民の心を心とし、断固として立ち上る。

る、「それは志なり」と松陰はいいます。草莽崛起の力を確信し、他に求めず自らすすんで「崛起の人」として生命をささげていこう——松陰は今だけでなく将来をも心中につみこんで正義のために献身する魂の息ぶきを伝えました。

7

成功するために時機をえらばず時勢に動揺することなく、ひたすら「草莽起」の志をつらぬく——どうして松陰は、この思想を決定的に自覚するにいたったのか？

なんと、松陰は日蓮聖人から「この策を思いついた」と語っているのです。「此の道至大、餓死・諫死・縊死・誅死皆妙、卻きて一生を偷む亦妙。一死実に難し。然れども生を偷むの更に難きに如かざる事初めて悟れり。」実に草莽の案なり。足下云はく、「往先崛起の人有るか無きかを考へて見ねばならぬ云々」。是れは勢を計り時を観るの論なり。時勢こそとまれかくまれ、義卿が崛起の人なり、放囚さへすれば義卿は一人にても連るなりと云へば粗暴に聞ゆれど、夫れは志なり。

義卿、義を知る、時を待つの人に非ず。草莽崛起、豈に他人の力を仮らんや。

恐れながら天朝も幕府・吾が藩も入らぬ、只だ六尺の微軀が入用。されど義卿豈に義に負（そむ）くの人ならんや。御安心御安心。

然れども貴答未だ承らざる内は諸友へ未だ和議を許さず候。

和作 足下

義卿白す

余が策の鼻(び)を云ふが、日蓮鎌倉の盛時に当りて能く其の道天下に弘む。北条時頼彼の髡(こん)を制すること能はず。実行刻苦尊信すべし、爰ちや爰ちや。

この策を思いついた理由は、日蓮は鎌倉幕府の威勢が盛んなときに、よくその教えを天下にひろめたが、幕府の執権北条時頼はその権力をもってしても、日蓮を制することはできなかった。というところにある。苦勞に苦勞を重ねながら事を行なうのは、大いに尊敬すべきことなのだ。肝心なのはここである。

(安政六年四月・野村和作宛の手紙)

松陰は、北条氏による幕府政治を霸道のはじまりといい、その大罪を批判していましたから、北条氏の権力にたち向った日蓮聖人の行為に同感する点があったのでしよう。

しかし、この言葉のもつ重みは松陰が日蓮聖人の志をうけとめ志を同じくするところから語られた点にあります。△帰命とは志のことである。それは仏にわが命をたてまつることであり、最も大切なものを供養する献身の精神と実践である▽(事理供養御書)と説いた日蓮聖人の魂にふれたところに、この出会いの深い縁があったのではないかと思ふのです。

民衆の塗炭の苦しみをおのれの痛苦とし仏の国土を淨めていくために立ち上り、堂々と勇猛心をもって幕府を諫め迫害にいささかも屈することなく「苦勞に苦勞を重ねながら」法華経の真理をひろめ立正安国の実現に奮闘した日蓮聖人。松陰はその生き方をわが身にひきつけて見つめなげら、大いなる志の実行に「尊敬」の念を深めたのでありましょう。△王地に生いたれば身をば随えたとまつるようなれども心まで随えたとまつらず▽(撰時抄)。民衆の立場にもとづき権力を諷刺し権力に制圧されなかつた不屈で苦難をのりこえていった日蓮聖人の「無二の志」と実践。松陰はそこに△草莽崛起▽の先駆者としての日蓮聖人の姿を、獄窓からはるかに見つけたのではなかったのか。絶望と孤独に苦悶する松陰の胸に、いかなる苦難にぶつかろうと、たやみなく勇猛心をふるいおこして権力に対抗し諫言の行動に立ち上れ、大いなる志をつらぬいて民衆とともに決起せよ、と語りかけたのは、ほかならぬ刻苦して事を行なった日蓮聖人の志と生き方なのでした。松陰が日蓮聖人にめぐりあえたのは、松陰じしんが諫言と△誠の志▽と民衆と△崛起の人▽である自覚と実践にとりくんだからでもありません。それは、歴史を担い創造し濟世をめざすもののみが共感しえる志の普遍性と永遠性のおかげであります。「草莽崛起の人」とは民衆の中から立ち上り、苦難のまっただ中で法華経を担った「地涌の菩薩」そのものを意味して

いるといえるのです。その肝心カナメの実践的精神を、松陰はただ日蓮聖人から思いついて自らの覚悟へと高め、草莽崛起の思想として宣言していったのです。松陰は、野山獄に身をおく最後の瞬間に日蓮聖人と邂逅し、ついに「草莽崛起の人」としての確信に到達したのでした。

松陰は五月に江戸へ檻送され、七月に伝馬町の獄に入牢、四月から数えて六カ月後には刑死の運命にいたります。

親思ふところにまさる親ごころけふの訪れ何と聞くらん

(父・叔父・兄宛の手紙)

「僕は平生の心のうちを諸友に語っておいたので、もう心残りはない。諸友も僕の心を知っているとと思うから、僕のことを悲しまないでもらいたい。僕の死を悲しむよりは、僕という人間をよく知ってくれるほうがいいのだ。僕を知るといふことは、僕の志をひき継いで、僕の志をさらに大きく実現することなのだ」(諸友に告げる書)。

松陰は大いなる志を身と心に読み刻み、日蓮聖人とのめぐりあいによって草莽崛起の思想へと開眼したのでした。

二十一回猛士・草莽崛起の先覚者吉田松陰の志は、数多くの志士にうけつがれていきました。久坂玄瑞は「草莽志士の糾合」をめざし諸藩志士のヨコの連携をつくり、高杉晋作は奇兵隊を組織して草莽の徒を決起させ、やがて諸藩

の草莽の志士たちはこぞって崛起して変革をリードしていききました。幕府側でも勝海舟は「卑職草莽の徒は身を犠牲とし高潔な心がけている。神戸海操練所を設けてこの者たちを集合し海外の地理人情を洞察せしめたい」と語り、坂本竜馬ら草莽の志士が活動していきます。松陰の蒔いた種は、「夜明け」を招きよせる変革の志気と思想になり、草莽崛起の大道を切り開いたのでした。

松陰の「草莽崛起」の思想と行動が、日蓮聖人との出会いによってもたらされたということは、日蓮聖人の蒔いた種が、時代を超えて松陰によって花びらの一つを開いたということでもありましょうか。

「草莽崛起」——法華經の種を人間と国土にうえた日蓮聖人の生き方を真に開花させていく志を高めよ。刻苦奮闘、行学に励み、苦難にたじろぐことなく「草莽崛起の人」への自覚を強めよ。現代の「大師講」と「松下村塾」をめがせ。草莽の同信。同行、同学の同志たちよ、立ち上って法華經と日蓮聖人の教えを社会にひろめよ！

私たちは、吉田松陰の留魂の彼方に聞える日蓮聖人の大いなる志と諫めの声に心を傾けねばならない。仏道を歩み一切の苦悩をなくしていく使命を担っている「草莽崛起の人」とは、他人のことではなく、私たち一人ひとりだけばならないはずなのですから——。